グローバル COE プログラム「アジア地域統合研究試論」　金曜セミナー　第 2 回

2007 年 11 月 2 日　５限（午後 4 時 20 分ー５時 50 分）
早稲田大学 19 号館 609 号室

梅森直之（大学院政治学研究科教授）
「アジア太平洋運動史の構築」
佐野智規（大学院文学研究科博士後期課程、GIARI フェロー）
「アジア太平洋運動史の構築：当面の事業計画」

梅森　梅森と申します。私は政治経済学術院のほうで、日本政治思想史を専門にしておりまして、このたびこのアジア太平洋研究科を中心に行われていますグローバル COE のプロジェクトに入れていただくことになりました。今日の主な目的は自己紹介ということで、われわれのプロジェクトで一体何をやるのか、そのプロジェクトに向けて、これまで私自身がどのような研究をしてきたのか、その概略をお話して、ぜひ参加していただける学生のみなさんをリクルートして帰りたい、と思います。具体的な研究の報告というよりも講義という形になりますけれども、ご了承いただければと思います。

これは、私が事業推進担当者として現在行っている、「アジア太平洋運動史の構築」というプロジェクトの内容です。現在ホームページに載っている文章そのままです。パンフレット等にも書いてありますので、もう既にご覧になった方もいらっしゃると思います。「一体化が進むアジア太平洋地域の歴史を、人と理念の移動とネットワークという視座から研究する拠点を設立する。本センターは、広くアジア太平洋地域の国際連帯をめざした運動家や組織についての情報を集積し、整理・公開する研究拠点となることをめざす」、であります。

いうまでもなく、このグローバル COE のプロジェクトは、アジアの地域統合に向けた人材育成ということが、プロジェクト全体の大きな課題というかたちになっています。私のプロジェクトは、そうした大きな目的に向けて、「歴史」ということからプロジェクトにアプローチしたい、と。その「歴史」の研究ということ、そのやり方じたいを、様々な地域を研究している若手の研究者をまず統合して、そういう形で研究を進めることで、結果的にアジア統合に向けた歴史を構想したい、これが目的です。

「アジア統合に向けた人材育成」ということは、非常に難しい課題だと思います。ただ同時に、私はそんなに悲観的に考えてはなくて、まず自分のまわりを地域統合しよう、という考え方ですね。歴史研究という研究分野は、今までは基本的に「縦割り」で構成されている。日本史だったら日本史、中国史だったら中国史、韓国史だったら韓国史という形で「縦割り」になっているんですね。この歴史を少なくともゼミやプロジェクトの中で地域統合する、ということです。アジア地域の統合は壮大で遠大なプロジェクトのように思えるのですけれども、同時に自分の身の回りの学問空間を、開かれた統合的なプロジェクトとして展開してゆく。そういう拠点がたくさんできていって、

それが積み重なることによってわれわれの大きな目標も達成できるのではないか。私はこのプロジェクト全体に関してはそういう見通しを持っておりまして、歴史を通じてやっていきたいと考えています。

歴史というのは、現在と未来から過去を見直す、ということであります。一国単位で、その国がどういう国であるべきか、ということが中心的な課題であったような時代であれば、その視座からその国の歴史を見直して、その国家に相応しい物語を作る、という一国史の考え方、これが重要な役割を演じてきたのですけれども、ただ、これからわれわれがアジア地域統合を果たそうとする場合、地域統合した未来の視座から過去を見ていく必要が出てくるわけです。そうした意味において、グローバル化した社会に対応しうるような新しいアジア太平洋地域の歴史パラダイムを考えてみたい、というのがこのプロジェクトの大きな課題ということになります。

今日の話は、こうしたプロジェクトに向けて、まず理論的な話と、私自身が今まで個人的なプロジェクトとしてこうした歴史の構築に向けてどういう成果を挙げてきたのか、それらについて簡単にお話して、紹介にかえさせていただきたいと思います。

まず、われわれが考える上で、こうした歴史を新しい方向から考え直していくという場合に、必要な糊塗がおそらく三つの R であると思います。今までの歴史を recontextualize する、つまり脱文脈化する。国という国境を自明のものとして考え、それを単位として考えてきたならば、それをいったん脱文脈化する。すなわち、アジア太平洋地域を一体のものとして問題化するような歴史、そしてその間の相互関係を中心に考えて行くような歴史、そういうものが必要となってくるでしょう。もう一つの R は、reconceptualization、つまり再概念化です。ここでいろいろ新しく空間的な認識を変えることによって、歴史を構成する様々な概念をもう一度構築し直す、この作業が必要かと思います。そうした新しい reconceptualization に基づいた形で、最後のＲである rewriting、つまり歴史の書き直しを行う。これら三つのプロジェクトを進めていくということが、一番求められていることではないかと思います。

ではここから話を戻して、現在の歴史がなぜ reconceptualize されないといけないのか、rewrite されないといけないのか、それについて私の考えをお話しさせていただきます。逆に言えば、今まで歴史が、一体どのような認識論、エピステモロジーに立脚して、そこでどのような機能を果たしてきたのか、ということを考えてみたいと思います。

私は、現在の歴史理論が抱えている最大の問題は、いわば近代化理論が一つの常識となることによって、さまざまな問題が見えなくなっている、それが非常な大きな問題として示唆できるではないかと思います。ここで近代化理論といういい方を、私自身は大きく象徴的な意味で使いたいと思っています。すなわち、戦後、日本の社会科学が常識としてきたような基本的な枠組み、それを近代化理論という言葉で呼びたいということです。

具体的に言えば、丸山真男という日本政治思想史の専門化がいます。彼の行なった戦後の仕事が一体何であったのかというと、日本社会の歴史を描く、日本社会の特徴を分析する、ということを課題として研

究を行なったわけですが、それが一体何だったのか、ということです。西洋の市民社会と日本が一体何が違うか、だから、西洋との対比、西洋との差異を問題化する、これが行われていたということです。だから実際には、日本を研究するということは、西洋と何が違うのかを明らかにすることだった、ということになります。

それは具体的に言うと、エドワード・サイードが『オリエンタリズム』という著書で問題化した、いわば「西洋と東洋の間に認識論的・存在論的差異を設けて、東洋を西洋に対する一つの鏡として、否定的な評価をしてゆく」と、そのある種の日本型の内在化した一つのバージョンであった、ということがいえると思います。こういう図式は、基本的に西洋とオリエントという「オリエンタリズムの認識枠組み」を利用しながら、それを西洋と日本という図式に変換する、そして進んだ西洋と遅れた日本、その上で日本をより近代化／市民社会化／民主化するためにはどうしたらよいか、こういう枠組みの中で行われてきました。

こうした近代化論的な認識枠組み、政治思想的には「戦後民主主義」といえると思いますけれど、この「戦後民主主義」は、1980 年代から 90 年代にかけて、非常に厳しい批判をあびることとなる。また「新しい歴史教科書を作る会」に代表されるような、いわばナショナリスティックな歴史認識、その代表が学習院大学の故坂本多加雄教授であります。ただ彼らの言い方も、サイードが批判し丸山真男が内在化していたような、「西洋対日本」という二元的な対立の枠組み自体をそのまま持つわけですよね。今まで西洋を基準として批判の対象であった日本を、今度は「それこそが日本の特徴である、日本の美徳である」という形でナショナリスティックにひっくり返す。だからこれは、オリエンタリズムの反対の意味でのオクシデンタリストのアプローチである、ということですよね。私からすれば、こうした西洋中心主義的な近代化論パラダイム、その問題性が自明なものとなったとしても、でもそれをオクシデンタリスト的にひっくり返すだけでは問題の解決にはならない、むしろ今言ったような認識論そのもの、パラダイムそのものを recontextualize する、そして reconceptualize する、こういう必要があるのではないか、と考えています。

図式的に考えてみますと、近代化論の認識論的なトリックが一体何だったのかといいますと、「空間的な差異を時間的な差異に変換する」という作業によって成り立っているわけですね。実際は西洋という存在があって、日本という存在がある。日本と西洋とは相互作用をしながら歴史的に存在しているわけですが、存在論的にいうと、その西洋と日本のあり方は、空間的な差異なんですよね。すなわち存在する場所が違う、ということです。しかしながらそれを近代というような価値を西洋に付与することによって、「進んだ西洋と遅れた日本」という形で、時間軸にそれを変換している、という形になるわけです。そしてこの日本のさらに下に、アジアがおかれている。西洋を頂点にして、それにキャッチアップする日本、そしてそれより停滞するアジア、こういう見方が常識の中で形づけられている、という問題があったのではないか。recontextualize することによって、reconceptualize しなければならない対象が何かというと、共時性であるとか、同時性で

あるということ、これをどうやって歴史の中にもう一度持ち込むことができるのか、ということですね。これがその一つのプロセスになるであろう、ということになります。だから、実際には西洋もアジアも日本も同じ歴史の時間の等しい時間を生きているわけですね。西洋が進んで、日本が中間で、アジアが遅れている、というように別々の時間を生きているわけではない。同じ時間を生きている、この点をどうやって歴史パラダイムに組み入れていけるのか。これを私自身は新しい歴史パラダイムを作る上での鍵となる問題と考えてきました。

この点をもう少し具体的に示していきたいと思います。例えば、明治維新をどういうふうに見るのか、ということですね。みなさんも明治維新という歴史的なイベントが一体何であったのか、と問われると、どういう答えがあり得るのか、自分だったらどう答えるか、ということを考えながら、聞いて頂ければと思います。

一番典型的な近代化論的パラダイムは、「明治維新は後発国型の歪んだ市民革命である」という理解です。「ある種の社会変革であったけれども、西洋のように『完全』に市民社会が実現することはなく、その結果、封建的な要素を残したまま遂行された」、日本の社会科学者は圧倒的にマルクス主義の影響を受けた中で、明治維新をこのように評価してきた、ということですね。もう一つ別の考え方としては、「非常に成功した社会革命である、非常にスムーズに、犠牲も少なく、これだけの社会改革を成し遂げることができた」というナショナリスト的な明治維新論が存在する。「日本人は調和を好むという文化的伝統がある」とか、「民族的に一体性が強かった」とか、「既に江戸時代において社会的な、識字率とか、文明化の度合いが非常に高かった」という理由ですね。前の見方が否定的に明治維新を評価しているとすれば、後の意識は肯定的に見ている。確かにそれらの評価は全然違いますが、両者に共通している見方は、明治維新がなぜ起ったのか、逆にいうならば、日本はなぜ中国やインドのように植民地化されなかったのか、なぜ独力で国民国家を打ち立てることに成功したのか、という問題に対する答えを国境の中だけに求めている。この点においては、二つの見方は変わらないのではないかと思います。

ただ、実際の歴史的な史料にあたってみますと、こうした見方と全く異なるような史料に出くわすことがあります。その一つ、私の非常に好きな例が、明治維新直前にイギリスの公使を務めたオールコックが残している日記であります。オールコックがいっていることを煎じ詰めると、「日本とイギリスの武力の差は圧倒的である、だからわれわれは日本を武力で占領しようと思えばいつでも簡単に朝飯前である」という自信を述べているわけですね。では、なぜやらないのか。オールコックによると、別にイギリスが日本を植民地化しなかったのは、日本が優れていたからではない、やろうと思えばいつでもできた、ということですね。なぜそれをやらなかったかというと、「われわれは their civilization ――これはアジアの文明という意味――を、スペインがメキシコでやったように簡単に吸収することはできないことを、それ以前の経験に基づいて知っているからだ」ということですね。（フロアの Alexander Bukh 氏から質問「"their" は『アジア』じゃなくて『日本人』のことではないですか？」）だから、彼がここで

述べている認識とは、アジア人――日本のこと――が、そこのなかに入るプロセスがあって、日本を武力によって占領することはできる、と。しかしながら、完全にそれを統一的に fusion することはできない、と言っているわけです。その fusion することができない理由として彼が具体的に挙げているのが、インドにおけるセポイの反乱、中国における太平天国の乱、これが出ているわけです。ですから、オールコックはインドや中国におけるイギリスの統治経験を参考にして、アジア人は強制的に文明をはく奪するような統治を行うとすれば、長い目で見れば必ず反抗してくる、だからこうした統治は割に合わない、直接的な統治ではなくて間接的な統治の方がベターである、という判断を下している、と読みとれると思うのです。

これは非常に面白い史料で、色々なことを考えさせてくれます。なぜ日本が植民地下を免れることができたのか、という理由を探す場合に、常に日本の国境の中に色々な原因を求めようとする。しかしながら、ここでオールコックがいっているのは、「インドでセポイが反乱を起してくれたから日本が植民地下を免れた、中国で太平天国が反乱を起してくれたから、いわばそれに懲りて、日本の軍事的な直接統治をやめる」ということです。これが私のいうところの同時性、そしてそれを地域間の同時性ということを意識しながらその相関性をもとに考えて行くということであります。インドにおけるセポイの反乱、中国における太平天国の乱、そして日本の明治維新が、同じ地域の中でまさに相関的に関係することによってでき上がってきた歴史ということになるわけです。

今までの一国史的な歴史からは、こうした見方がまったくできない。従って日本が遅れていたのか、日本には優れた要素があるのか、という話しになっていて、これからアジアとインドと日本と中国を地域統合が進む、そうした状況ということを目指して行われるような歴史認識の助けとはならないわけですね。今いったような見方で過去の歴史を再文脈化／再概念化していく。これは過去を対象とする行為ですけれども、同時に未来に向けた実践であるといえます。

それでは、前置きはこれくらいにして、これから私自身が今までこういった視座からどのような業績を挙げてきたのかを話させていただきたいと思います。

私がやってきたことの一つは、「権力のネットワークについて一国史を離れて書き直してみたい」ということです。統治する側が国境を越えて相関することによって、この日本を中心とするような東アジア的な秩序の形成に貢献してきたのか、ということの見直しをやってきました。もう一つの視座は、「対抗運動」、すなわち「統治に反抗する側・反対する側・それを超えようとする側、そうした運動がどのようなプロセスを辿ってきたのか」です。国境を超える歴史を決してユートピア的なものとして視るのではなく、もちろんそれは国境を超えた歴史であるけれども、「日本人と韓国人と台湾人が平等に協力してきて美しい共同体を作り挙げてきた」という単純な話ではなくて、徹底した権力関係に貫かれた場の中での統合でしかなかった、それを権力という問題とその裏表の関係としての運動、その両方から考えてみたい、ということです。今までのプロセスとしては、まだ明治から大正

にかけての時代までしか研究が進んでいないので、これを現在に近づくところまで拡大していきたい、ということです。対抗運動の歴史をこのプロジェクトの中心的事業として、より現在に近いところで考えて参りたいと思います。

私自身は、社会主義者の東アジアにおける連帯という 20 世紀初頭の問題について検討したことがあります。もう一つの形としては、アメリカにおける日系人の思想が日本の思想状況とどのように相関関係を持っているのか、これを今まで行ってきましたが、限られた断片的なものでしかありません。それをこのプロジェクトの中で大きく育てていきたいと考えています。

今日はせっかく来ていただいたので、理論的成果という話しを三つさせていただきます。今までの運動の側の研究に加えて、これから本格的に行う研究として、国境を越える権力の側の問題を追求することによって何が見えてきたか、これを簡単に三点だけお話しさせていただきたいと思います。

私の博論のテーマは、明治初期における監獄・警察制度の形成でした。その研究で得た一つの理論的結論は、明治国家が植民地政府によって非常に大きな影響を受けている、ということです。具体的に言うと、日本の警察や監獄が、明治初期において一般的に言われているように、フランスのようなヨーロッパをモデルにして作られたというよりも、むしろイギリスなどの香港の警察・監獄をモデルにして作りあげられた側面が多いことです。これをどう論証したかというと、一般的に日本の近代化は「いかに西洋を学びそれを自らのものにしてゆくのか」という物語として、「そこでこんな苦労をしました、こんな努力をしました」という語りになっています。

警察も例外ではなくて、実際に明治初頭にフランスに警察調査に行って、それをもとに日本の警視庁ができたと通説的にはいわれているわけです。しかしながら、それより前に香港の警察に行って、同じような調査をし、同じようなレポートが書かれている。私の問いは、この二つの調査のうち一体どちらが役に立ったのか、ということ。それから同時に、どのように香港の警察の調査が隠されていくのか、という話ですね。実際にレポートを読んでみると、一目瞭然、はるかに香港レポートの方が役に立っているということがわかるわけです。それが何に由来するかというと、当時の社会状況がフランスの市民社会よりも香港の中国人社会の方が日本社会に近かった、ということです。当時、フランスの警察の一番重要な任務は交通整理ですね。馬車をどのようにコントロールして交通を上手く流すかが非常に重要な任務だったわけです。しかしながら、当時の日本には馬車が走るような大きい道が存在していなかったわけです。そうした社会状況を考えてみるならば、中国人社会を対象にした香港の植民地警察から得た情報の方がはるかに実践的な意味を持ち、そしてそれに基づいて日本の警察が作りあげられていった、という側面があります。ですから、社会文化的な共通性に基づいて、植民地をまねた方がはるかに日本の国家形成の初頭においては役割が大きかったということになります。

問題は、これらは隠された資料ではなくて、これら二つのレポートはともに公刊されて利用可能な形で出ているわけです。しかしながら、

日本人も、そして非常に興味深いことに西洋の学者も、西洋における警察調査の意義だけを強調して、ほとんど香港における警察調査の問題は論じられていない、ということですね。

これが何故か、ということですが、私はこれを「カンニング効果」と名付けています。「西洋の非常に難しい国家の制度を苦労して身に付けたんだ」という物語は、ある種のナショナルなプライドを刺激するわけですね。西洋の側も「われわれが文明の真髄を教えてやったんだ」ということになるわけです。そこに植民地を入れると、ある種「答案を見せてやった」、「カンニングさせてやった」というわけです。近代的な国家制度を作りあげる上で、ある種の「簡単なモジュール」が植民地に存在しており、それを真似したということになるわけです。カンニングは見せた側も見せられた／見た側もあまり言いたくない、という心理的な規制が働くのだろうと思います。だから西洋の側でも、今までこの問題についてほとんど議論してきてない。そして日本の側も、植民地の警察をまねたとはいえない。

これは、「白人がアジア人を統治するようなやり方で、明治政府が日本人を統治したのだ」という、スキャンダラスなインプリケーションになりうりますから、非常にナショナルな物語には回収されがたいわけですね。だから今までほとんど見えてこなかったのではないかと思うわけです。こういったものを reconceptualization してゆくということ、つまり日本の警察制度を作りあげていくその根源には、決してヨーロッパの文明だけではなく、日本人だけではなくて、香港でイギリスの警察に捕まったり、それを逃れたりしながら生きていた中国人の歴史的な経験というのも、日本の近代的な警察の包芽のなかには流れ込んでいたということです。

もう一つの具体例は、日本の警察が一体何をしてきたのか、ということです。交通整理はやらないわけですね。では、一体何をするのかというと、文明化のエージェントになるわけです。すなわち、何が文明か、ということを庶民に対して提示することが警察の大きな役割になるわけです。その典型的なものが「違式詿違条例」という明治初期の法律です。これは今まで日常的な生活の一部であった、例えば裸で往来を歩くであるとか、混浴で入浴するといった日本人の日常的な生活の一部であったものを、新たに「文明」という視座から犯罪として規定し直して、そういう行為を行ったものは処罰の対象とする法律ですね。日本の警察が明治初年に果たした影響・役割を象徴的に示す例としてあげられる。裸体、もしくは肌脱ぎして股とか脛とかをさらし醜態を為すもの、こういったものをすべてあらたに処罰の対象とする。従来、ヨーロッパの警察研究者は、日本の警察の特徴的な実践であるとして、こうした文明化のミッションを特徴づけてきたわけですね。しかしながらこれにはタネ本があって、「上海邏卒規則」と「香港邏卒規則」の引き写しになっているわけです。もともとイギリス人が上海や香港という場において、現地の中国人を「文明化」するために作りあげた一つの法規、これを植民地での調査に基づいて写して、それをもとに作りあげたのがこの法規ということになります。ですから、今まで考えられてきたように、日本の特徴をあらわす警察制度というよりも、むしろ植民地の特徴を表すような警察制度と見るべきである

でしょう。
　二番目の例は、「監獄則」という日本で最初にできた監獄についての近代的な立法です。これは、明治維新からわずか五年の間に導入された本格的な日本の監獄立法です。この監獄則という法律には「図式」がついておりまして、監獄がどういう「構造」を持たなければならないのかの緻密な図がついているわけです。この図をご覧になってわかると思いますが、 ミシェル・フーコー が『監獄の誕生』の中で描いた、近代の権力の典型として描き出したパノプティコン、一望監視装置というシステムですね。この中央に監視者がいることによって、この監獄を見通すことができる、近代的な監獄の建築の認識が早くから入ってきていることがわかるわけです。パノプティコンの発明者ベンサムですが、日本においてはベンサムのベの字も入ってこないうちに、こうした統治の形式や知識が早い時期から入ってきている。問題はこうした図式を誰がどこで入手したのか、ということです。私の調査によると、おそらくシンガポールに日本の警察官僚が調査に行ったとき、シンガポールの監獄の署長からもらった可能性が一番高いであろう、と。調査のレポートによりますと、「非常に詳細な監獄の図面をもらって嬉しかった」っていう記述がありますので、おそらくその時にもらった図の中にこうしたパノプティコンの図も入っていたと思われます。
　こういうふうに見てみますと、「西洋対日本」という枠組みは、植民地という場で相互補完的な関係を持っているわけです。ですから、どちらがどちらを植民地化するとか、それに対して反抗するというよりも、お互いが助け合うことによって日本の近代的な国家制度が生み出され作られる、いわば植民地を舞台に作りあげられていく、これが見えてくるわけです。これが明治初頭までの話ですね。
　もう一つ例を示させていただきますが、日本が植民地化を実際に自分で行うようになる、つまり国民国家形成が終ってですね、台湾と韓国を植民地化する、いわば帝国になったとき、一体どのような問題が生じてくるのか、という研究を行った時の一つの成果です。私自身、非常に興味深いと思ったのは、笞杖刑（むち打ち刑）の問題です。むち打ち刑は、中国や韓国、日本といった東アジアでは一般的に用いられる伝統的な刑罰であり、日本においては少なくとも徳川の時代まで非常に広く行われていた、ということです。明治に入ってからの最初の刑法であります新律綱領の中にも、むち打ち刑が法律として規定されている。
　しかしながら、1882 年に作られたフランス最初の刑法に基づいて、日本は非常に早くむち打ち刑の廃止を打ち出しました。むち打ち刑は非常に暴力的な刑罰である、非文明的な野蛮な刑罰である、だから文明国には相応しくないので、このむち打ち刑を廃止する、という宣言を早い時点で出したわけです。日本国内だけでフォーカスしてみると、この話はここで終わって、日本の伝統的な刑罰が近代的な刑罰へと変わっていったというエピソードの一つにすぎない。
　ですが、ここで日本の台湾統治という問題を入れてみると、台湾も日本と同じ刑罰・刑法になることが自明の前提になるわけです。そこで日本の刑罰の近代性が強調される形になる。すなわち、神国の統治

下においては、むち打ち刑のような残忍な刑罰が行われていた。でも日本が台湾を統治するようになったので、むち打ち刑のような残忍な刑罰が廃止されて、いかに日本の統治が優れたものであるかのシンボルとして用いられたわけですね。しかしながら 1905 年になって、台湾でむち打ち刑を復活させるという命令が出されることになるわけです。これは端的に言うと、刑務所が足りなかったのが一番大きな理由です。「刑務所が足りないので即決する必要がある」というのです。こういうやむにやまれぬ事情で、笞杖刑が台湾で復活する。それにならう形で、今度は韓国でもむち打ち刑が導入されるということになるわけです。このようにむち打ち刑の歴史を見てみると、本国で消えたものが時間をおいて他の植民地で復活する、という興味深い現象が見られる。最終的に韓国では 1920 年に廃止され、台湾では 1921 年に廃止される、こういう経過を辿ることになります。

私は笞杖刑を導入する、もしくはそれに反対する場合、どのようなロジックに基づいて導入の賛成や反対が行われているのか、これを興味深く追求してみたい。（ハンドアウトにある）図は、こうした論争の中でむち打ち刑の意味付けが変わっていくのか、というのを象徴的に示したものです。縦軸が時間軸で、横軸が空間になります。もともと、むち打ち刑は前近代的な刑罰であって、伝統的なアジア的な刑罰である、反西洋的な一つの刑罰のあり方なのだ、という議論が行なわれている。そのため、明治国家はむち打ちを廃止したわけですね。もともとむち打ち刑は存在していた。しかしながら、なぜ台湾でむち打ち刑を導入しなければならなかったというと、台湾という場所が前近代的な空間であり、また住人が中国人であったため、中国的なアジア的な刑罰に慣れている人々であった。だから日本において笞杖刑を廃止しなければならない理由、そして台湾において笞杖刑を復活しなければならない理由、そのいずれもがここにむち打ち刑を位置づけることによって成立していった、ということですね。

ただ、これに対して強い反応を投げかける法学者たちは、「当時の世界において一番むち打ち刑が頻繁に行なわれている場所はどこか」という議論をするわけですね。そして、「それはイギリスの植民地である」というのを議論として持ってくるわけです。彼らは「むち打ち刑は、伝統的なアジア的な刑罰ではなくて、むしろヨーロッパの刑罰なのだ、ヨーロッパがアジア人を統治する時に使う刑罰なのだ」と読み変え（reconceptualization）をしてゆくわけですね。「こうしたヨーロッパの悪癖をなぜ日本が学ばなければならないのか、台湾においてむち打ち刑を絶対に導入してはならない、それは結局、西洋の植民地支配の野蛮さを繰り返すことになるのではないか」、こういう批判の仕方をするわけです。批判者の側は、時間軸でいえばむち打ち刑を前近代的なものであると位置づけている。このことは正しいですけれども、空間の次元を西洋の側に持ってくるわけですよね。「これは本来的に植民地的な実践であるから笞杖刑をやってはならない」という話になるわけです。

今度は統治者の側、すなわち総督府の側は、この議論に対して自分たちの笞杖刑の導入を正統化しなければならないわけですね。むち打ち刑が非常に植民地的な刑罰であるのは事実なので、この部分は否定

できない。そのため、彼らはどういうロジックを作るかというと、日本が台湾において導入した新しいむち打ち刑は、西洋人が使っているむち打ち刑とは全然違うのだ、という形で差別化しようとする。その根拠が一体何であるかというと、例えば「どういう力の入れ方で何回打つか」ということが厳密に決められている。そして西洋の植民地においては公開でむち打ち刑が行われるわけですね、それに対して、日本の新しいむち打ち刑は隠れて、見せ物の形にしないで行う。なおかつ医者がついて、常にむち打ちをされる側の健康状態を気づかいながら刑が行われる、というふうにいうわけです。そうしたむち打ち刑は、実際に不衛生な監獄の中に入れられるよりもむしろ健康に良い、という議論をするわけですね。その結果、新しい flogging （むち打ち刑）は、より文明化された人間的な刑罰であるから、この刑罰を実施すべきなのだ、と。いわば国家暴力の意味が、こういう経路を通じて大きく変遷してくる、これは非常に面白い所だと思います。

ここから先は論証が必要なところですけれども、1920 年に制度としては植民地での暴力はなくなるわけですね。ただ廃止の議論をいろいろしてみると、なぜ廃止しなければならないのかについて、誰も明確な答えが出せない。そのような状況のまま、なんとなく廃止される、ということになります。すなわち、むち打ち刑が個々の状況にとどまっているならば、なぜ廃止しなければならないのか、という理由は明確なわけです。しかしながら、むち打ち刑が文明的で人間的な刑罰ならば、そもそも廃止する必要はない。問題は日本人にこれが適用されないで、植民地の人間だけに適用されるという、そういう差別である。そこでの有力な議論の一つとしては、「そんなにむち打ち刑がよいものであるならば、なぜ韓国人や台湾人にだけ適用し、日本人に適用しないのだ、本国にこれを適用すれば良いのではないか」という議論がささやかれることになります。これに対する明確な否定が行われないまま、統治というか決着が付けられるという形になります。

1930 年代あたりから、反政府的な言動をする人間に対して、日本の警察が強い暴力をふるってくる、そういう状況がでてくるわけです。そういった国家権力が使う暴力についての意味付けは、植民地を通った後に本国へと回帰することによって、ある種の暴力性が醸成されてくるということになるのではないか、これが現在の特徴として考えられます。こうした統治をめぐる問題を、1945 年あたり――日本が植民地を放棄して、「平和国家」を実現する頃――に注目して、一体何が起ったのか、ということを今後の課題として研究したいと思います。

警察であるとか、監獄であるとか、どちらかといえば憂鬱な研究を今まで続けてきていて、今度はそれとは異なるような、もっと希望のあるような国際連帯・統合の研究をしたいと強く思っておりまして、それを社会運動の歴史的な相関関係と統合を考えるプロジェクトの中で考えていきたいと思っております。

私の報告は以上で終わらせていただきたいと思います。われわれのモットーとしては「身近なところからコツコツと始めていきたい」というのがあって、現在手持ちにどういう史料があって、それを具体的にどういう形で進めていくのか、こういった話を RA の佐野さんからしていただいて、本日の締めとさせていただきます。

質疑応答

黒田　タイトルについてですが、「アジア太平洋運動史の構築」というのを、地域共同体もしくは地域共同体とどのように研究をされるのか、非常に興味深いですので、今日の話をうかがえて嬉しかったです。

グローバリゼーションとリージョナリズムの関係についてですが、上からのグローバリゼーションも強くなるけれども、下からのグローバライズされたネットワークが対抗軸になるということをよく耳にするのですが、そういうコンテクストの中で、東アジアの共同体とか地域統合も、上からの運動と下からの運動があり、また先ほど権力と運動の両方からというお話がありましたが、この点も歴史的に見て行くことができる、というふうに理解してよろしいでしょうか。

もう一つコロニアリズムについてですが、先ほど「インドのセポイの反乱と中国の太平天国の乱がなかったら、日本の独立が危うかったのかもしれない」という非常に面白い話をうかがいました。そういうコロニアリズムに対して、例えば「大東亜共栄圏」のような「対抗軸としてのアジア」がその後のさまざまな歴史の局面で見て取れます。その一方で、自生的な形での「アジア」というものはありうるのか、という問いかけがアジア統合を考える時に常にあると思います。つまり、例えば運動であっても、対抗軸ではなくて自生的にネットワーク化していくようなアジアというものがあるのかないのか、このことが興味のあるところです。

「非である」というか「反である」ということと、「主である」ということ、「非」であって「主」でもあるということもあるのかもしれない。つまり、西洋に対して「反である」と思っているところが、香港からももっと学んでいた、と。そこにはもちろん植民地という構造があると思いますが、だんだんと南−南協力といってよいのか、自生的に学んでいこうというような、学ぶことが実体的にできるような状況、学ぶだけでは連合するなどがでてくる。ですから、それは「非であって主である」ということなのかもしれません。

つまり、自生的な部分というか、主としてアジアがいっていくような部分というのか、歴史研究もしくは運動史の中から出てくる可能性があるのか、というようなことをお聞かせいただきたい。それと「非であり主であり」ということも運動史の中にあるのか、ということをお聞かせ願えますでしょうか。

梅森　最初の問題は非常に大きな問題で、自生的な秩序があると答えないと、このプロジェクトとしては具合が悪いと感じていますが、私自身はちょっと懐疑的でありまして、むしろそれを前提とすることのデメリットの方が大きいのではないか、と思います。その辺については、批判的なスタンスは守りたいと思います。そうするとアジア統合という問題がいえるのか、という根源的な問題が出てくるのですが、そこのところはアジアから来た留学生とともに研究することによって実質的な統合を図りたい、ということになっているわけですね。

私がこうしたグローバリゼーションによる歴史の見直しを考えて

いる一つの大きな軸は、ベネディクト・アンダーソンの最近の仕事で Early Globalization というコンセプトです。これは 19 世紀末から世界は既にグローパル化していた、それを支える非常に大きな枠が通信の大きな発達という新しい社会的な状況だった、ということです。この通信という軸を考えてみると、空間的な距離がゼロになる、という話なので、むしろ地域というものを超えたつながりが全面的に出てくるという話になります。アンダーソンがそこで議論しているのは、例えばキューバ革命とフィリピンの革命と、アフリカのボーア戦争と中国のナショナリズムがどのように相関していたのかという話なので、そこではアジアという地域自体は前面には出ない形になっています。私自身も、初期社会主義者の歴史を考えてみると、ともに日露戦争に反対して連帯の動きを見せるものとして、日本の社会主義者とロシアの社会主義者のあいだの連帯が強く出ていて、地域という問題は必ずしも大きな軸とはならない、と考えています。それをあえて強くイデオロギー的に出して来たのがアジア主義であり、そういったものが大東亜共栄圏につながっていったというのがあるので、あまり簡単に「自生的なアジア」や、実体的な共通性みたいなものに重きを置くよりも、そこのところは徹底して構築主義的に考えたいと思っております。

ただですね、先ほど述べたように、社会文化的な共通性は否定できないものとしてあるわけです。これは統治する側にも運動する側にもあるし、圧倒的に地理的な近さというものが東アジアを巡ってはあるわけです。好むと好まざるとにかかわらず、人の動き、流動性、一体化というものは、この地域の中で質的な違いがあったとは思いませんけれども、量的にそれが高い水準にあったのは事実だと思います。その量的な差というものが、アジア統合という問題を他の地域統合と違った形で問題化する意義を与えていると考えています。

今のところどちらかといえば、私は自生的にアジアという地域を見るのではなく、むしろそうではない視方をとりたいと考えています。他在的には、アジアという見方が自称ではなくて他称であった。ヨーロッパから名指しされた対象がアジアであって、われわれは伝統的に言えばそれを「アジア」と見なす。そういうものは、少なくともウェスタン・インパクトの前には無かった、という問題です。これは大きな問題として考えていかなくてはならないと思います。

ご承知の通り、「東洋」という言葉は「中国の東にある」という意味ですから、「東洋」という言葉はもともと日本を意味していた。徳川時代には、日本を意味していた「東洋」を、今度は日本がアジアを考える上で「東洋」というものを投影しなおして、その一つの地域介入を為すわけです。そういう問題を考えていきますと、「自生的」なものに可能性を見出すことは難しいと思っているわけです。

佐野　佐野と申します。このグローバル COE の RA を 10 月から勤めさせていただいています。宜しくお願いします。あと時間が 5 分しかないのですが、具体的に何をするのかを紹介したいと思います。

まずアジア地域統合と言った場合、誰のための統合か、ということが気になります。RA の面接を受けるときに、「君らのやっているこ

とは歴史だ、昔のことでしょう、今の目下のアジア地域統合とどう絡むのか」ということを、確か天児先生に聞かれました。人材を育成するというプロジェクトで、どういう人材を育成するかという時に、「アジア地域統合が何らかの利益になりますよ」ということを誰かに説明しうるのか。アジア地域統合による利益を説明できる人材を作りたいということですね。

しかし、「アジア地域統合」と言ったとき、政治・経済・外交・軍事などの交流・障壁の除去／統合は確かに進展していますけれど、文化や情報などの共有はそう簡単にはいかないだろうと思われます。さらに、歴史についてアジア地域全域のコンセンサス形成は可能だろうかと考えた場合、かなり絶望的な気分になってしまいます。確かに、統治インフラの成熟が文化や歴史などの共有をもたらすだろう、という楽観論も一面では正しいと思います。だからといって、文化や歴史などに関わる複雑な問題を放置するわけにもいきません。そこで何が必要かといった場合、わたしたちのプロジェクトは「広くアジア太平洋地域の国際連帯をめざした運動家や組織についての情報を集積し、整理・公開する研究拠点」、これを作るのだと先ほどから梅森先生がおっしゃっているわけです。

これは何かというと、「歴史・記憶に関する危機管理について考えていきましょう」ということです。経済分野での危機管理、政治分野、軍事、いろいろあると思いますが、一番面倒くさい「歴史・記憶についての危機管理」について考える、そういう人材を育成したいと考えているわけです。具体的に何を使ったらいいのかといった場合に、われわれの手元には本学大学史料センターが所蔵している非常に有用な史料があります。戦後政治史・社会運動史の超一級史料でして、アジア太平洋運動史のリソースとして当面は考えています。非常に面白い来歴を辿っているので、時間がないのですが紹介します。

もともとは社会党本部にあったものだと推定されています。社会党の参議院議員を務められた戸叶武氏と社会党衆議院議員戸叶里子氏夫妻、吉村正・本学政治経済学部教授のご尽力によって、大隈記念社会科学研究所に移管されたのですが、これはアジア太平洋研究センターにゆかりがある史料で、図書館に行かなければここにあったはずの史料なのです。その後、早稲田大学図書館の本庄倉庫、そして最終的には大学史資料センターに移され、今年度からデータベース化と調査研究を目的として現代政治経済研究所に置かれました。スライドを使って具体的に見ていくと、まずは「脱党届」、「分裂大会前重要文書」、外文、決議文、ビラ「幹部総出動」など、こういった史料です。全部で 80 箱程ありまして、内容としては㈰各種通達類・活動報告・調査資料など党本部関係の資料、㈪党本部への要請書や報告書・名簿など地方支部関係の資料、㈫広報・国会本会議・委員会議事録、㈬要請書・陳情書・その他労働組合・協同組合関係資料、㈭各種機関誌や党発行の冊子類、㈮アジア社会党会議・国際社会主義運動関連資料を含む外国語資料等、㈯その他早稲田大学関係の資料等に分類されます。時期は 1945 年頃から 1960 年代半ばまで、日本社会党結党から片山内閣、左右分裂と合同などについての一次資料を含みます。

さて、「アジア太平洋運動史の構築」プロジェクトにとって興味深

いのは、「アジア社会党」関係の資料群です。「アジア社会党」とは何か。大東文化大学東洋研究所の雑誌「東洋研究」に掲載された、村田克己氏の論文「アジア社会党会議――第三世界の非同盟中立主義への一道程として」に基づいて、概略を述べたいと思います。時間がないので端折って説明しますが、「危機感の共有」によってこの運動がもたらされた、ということですが、ここでの危機感とは、戦争、共産党、植民地、低開発といった 1950 年代的なものです。発起人はインドのダムマノハル・ロヒア、ウ・チョウニェン、ウ・バ・スエ、インドネシアのスタン・シャフルという方ですね。日本社会党、この時既に分裂していましたが、準備会議から参加しています。実際の会議は 1953 年 1 月 6 日から 15 日まで、ビルマのラングーンで、10 カ国 11 機関の正式参加、5 機関のオブザーバ、友好団体 4 機関が参加して、「アジア社会党会議」が開催されました。

「アジア太平洋運動史の構築」プロジェクトが何をしたいのか、さしあたっては、アジア社会党についての史料を共同調査・研究することで、情報交換と蓄積をやっていこう、と。具体的にいうと、お仕事の紹介を通じて、情報と若手研究者を出会わせようということです。

梅森　今、佐野さんが「10 カ国 11 機関」といったけれども、それぞれの国でどういう人が来たかという名簿は残っているのですね。だけどそれが一体誰で、どういう人生を送って、こういうところにたどり着いたのか、ということは全く日本側から見えないわけですね。

Bukh　Google では駄目ですか？

梅森　Google で分るところもありますが、アジア太平洋研究科にはいろいろな所から来た人がいるわけですから、そういう人たちと共同研究を進めることによって、情報の蓄積を図っていきたいと思っております。

黒田　私は梅森先生の特異な博士論文に吃驚しました。監獄の歴史という、面白いものを研究なさっていたんだな、と。ここからアジア統合というところに結び付けていく、というのがちょっとよくわからなかったのですけれども、こういったデータ整理をどのようにアジア統合に結び付けていくのか、筋というものをお聞かせいただけますか。

梅森　「歴史の筋をつける」ということは、実際には歴史の中からは内在的に出てこないと思っていて、最初に話したように、将来どういう社会を描くか、これがまずあって、その将来の状況から過去を整理していく。それが歴史というものの作られ方になると思います。今の質問は、私自身が将来のアジア地域統合に対してどういうビジョンを持っているのか、ということに関わっているでしょう。それが明確に出てないということは、現在のところは明確なビジョンを考えることが、私自身難しいということを映し出していると思います。なので、ちょっと逃げるような形になりますが、これから考えていきたいと思います。

先週の日曜日から台湾に行ってきて、国際会議に出てきたわけですが、われわれは日中間という枠組みでアジア統合を考えがちだけれど

も、将来台湾を入れるとどうなるか。台湾の未来がどういう形のものとして存続することができるのか、これは困難な課題ですね。台湾の研究者自身も自分たちの将来に対する明確なビジョンを出すことができない、その問題の深刻さだけは私自身も感じて帰ってきた所であります。だから、「こういうビジョンを作ります」というポジティヴな形は出せないのですけれど、「少なくともこういうビジョンは出すことはやめましょう」ということは言えるのではないかと考えています。

Matsuzaki　George Orwell が昔、「今を支配するものは過去を支配し、過去を支配するものは未来を支配する」と皮肉っぽくいっていましたが、言い換えれば、今を生きる人が過去を創造し、過去の創造によって未来を創造することができる、ということだと思います。将来のアジア統合を考えてみますと、同時に歴史という過去の話をしていかないと未来のことを語れない、ということなのではないでしょうか。

Bukh　先生の話はすごく難しい。梅森先生の認識の中では、歴史は未来から見る、ということになっているのですね。だけど先ほど黒田氏の質問の中で、未来についてのビジョンは無い、と。未来のビジョンはないのに、どうやって歴史を描けることになるでしょうか？

梅森　だから未来に完全なアジア地域統合が果たされた状態というものを想像することはできないけれども、明日ちょっとだけ統合された、ゼミの人間関係がちょっとだけ良くなるとかね。この研究の情報がちょっとだけ積み重なるとか、そういう状況というのは十分想像できるわけであって、そういうところの積み重ねというものを中心に考えていきたいということです。

黒田　教育分野で何とかフレームワークを作ろうと模索しているのですけれど、現状の統合に対する研究っていうのは、例えば経済の方とかやられますよね、それを教育でも同じようにやろうとしているわけです。たとえば地域統合とか地域協力についての枠組みがいろいろあるので、それを並列に並べてその問題点を集約するとか、構造を見ていくということはできると思うのですが、それはある意味で現状の話で、歴史的な広がりを horizontal ではなくて vertical に持っていくと、もっともっと広がるな、と思ってうかがっていました。
　私は高等教育について見ているのですが、例えば大学っていうのもまさに運動体として見ることもできますね。大学そのものの歴史、学生もそうなのですけれど、その中にアジアというものがどう生まれていくのかと考えることが、アジア地域統合についての何らかの知見を得ることができるのではないかと思いました。

梅森　その通りです。運動といったものをできるだけ広く捉えたいと思っていて、まさに教育というものも運動であって、経済も運動であって、医学とかそういう分野も基本的には運動として研究が可能である。そういう所でインタラクションした人たちが実際にどういうような生

を生きたのか、といったことを共同で研究して記録していく、ということは、未来に対する一つのビジョンを作る上での、佐野君の言い方だと「危機管理」という言葉ですかね、そういう運動として考えていくことができるのではないか。だからいろんな分野に関心を持っている人に参加してもらえるような、歴史研究のプロジェクトにしたいと思っています。

記録：佐野智規（GIARI アジア地域統合フェロー）
編集：高橋華生子（アジア太平洋研究科助手）